平成26年（2014年）　8月25日（月曜日）　High school news AKUTAGAWA　©芥川高校　H26年度 9号[No.196]
発行　大阪府立芥川高等学校　〒569-1027　高槻市浦堂1丁目12-1　TEL　072-689-0109　http//www.osaka-c.ed.jp/akutagawa　平成17年10月20日創刊

学校新聞 芥川

和太鼓部　全国高校総文祭優勝！

和太鼓部顧問

茨城県神栖文化センターで開催された第38回全国高等学校総合文化祭郷土芸能部門で和太鼓部は大会2日目のトリで、「咲くやこの花」を演奏しました。今年はこれまでの経験から、郷土色を強く前面に押し出し、高校生にとって最高難度のテクニックを駆使した演奏で勝負を挑みました。部員たちにとっては過酷な日々だったと思いますが、猛練習の末、次第に高度な演奏技術を身につけていきました。

本番はパワフルで若さに満ちた演奏となり、部員たちも心底楽しんでおり、客席からも途中で拍手が起こるほどの出来映えでした。

演奏した次の日の7月31日は朝から大会3日目の各校の演技を鑑賞しました。さすがに常連校の演技は素晴らしく、部員の中には「絶対、優勝できる。」と自信たっぷりの者がいた反面、「他校の演技を見るのがこわい。」という者もいました。

そして閉会式が始まりました。誰もが待ち望んでいる審査結果の発表です。例年の優勝候補の京都橘高は3位の優良賞と発表されました。和太鼓部門の上位入賞は4校ですが、下から順に発表された3校までの中に芥川は入っていませんでした。

そしていよいよ、最後に全国1位の優勝校の発表です。1000人の聴衆がシーンと静まり、固唾を飲んで見守る中、「大阪府立・・・・」という声が響き渡りました。その瞬間、寄り添って座っていた部員たちが「わーっ!!」と声を上げました。抱き合う者や泣く者もいました。部員たちも顧問もすぐには信じられないような結果でした。

表彰式は部長と副部長が壇上にあがり、「優秀賞」と「文化庁長官賞」の2枚の賞状と盾を、堂々と受け取りました。部員も全員立ち上がって、「ありがとうございました!」と満員の会場にお礼を言いました。会場からは長く大きな拍手が贈られました。

そして、8月30日に国立劇場での、和太鼓部にとって9年ぶり2回目の優秀校東京公演が決定したのです。

和太鼓部　宮城県気仙沼訪問交流

和太鼓部顧問

全国大会で優勝を勝ち取った和太鼓部は大阪に戻らず、その足で私たちの訪問を待ちわびている東日本大震災の津波被災地、宮城県気仙沼市に向かいました。

8月1日夜は、鹿折中学校住宅（仮設住宅）で演奏会をしました。学校から持参したライトを点灯し、夕食を済ませた皆さんも集まってきて、演奏会が始まりました。途中、餅つき囃子では、住宅の人も飛び入り参加するなど、どんどん盛り上がって、演奏会は盛況に終わりました。

演奏の後、それぞれの部員が文通相手の方々と会いました。89歳の一人暮らしのおばあちゃんは女子部員の手を引いて、自分の住宅に連れて行き、孫に再会したかのように、冷蔵庫の食べ物を包んで部員に持たせ、「牛乳を飲みなさい。」と勧めるなど、嬉しさを隠しませんでした。

次の日（8月2日）は、午前中、フィリピンレイテ島の小学校を復興しているご夫婦、ハワイ大学のICTの先生方、仮設住宅の方、気仙沼のNPO「底上げユース」の大学生・高校生たちも参加して、それぞれの講話を聴いたり、復興に向けてそれぞれの立場で何ができるのかを討論しました。午後からは市内の特別養護老人ホームを訪問し、演奏の後、お年寄りと写真を撮ったり、太鼓を叩いてもらったりして交流しました。

夜は「はまらいんや（あなたも入っての意）踊り」を見に行きました。様々な団体が道路いっぱいに踊りの輪を作っていました。部員たちも「底上げユース」のグループを見つけ、踊りの仲間に入って楽しみました。

3日目はメイン行事の八幡太鼓とのコラボ演奏会がありました。市街中心部ですが、津波で流されたままの広い空き地が広がっていて、震災前のデパートの跡地が演奏会場でした。和太鼓部の演技には多くの人々が集まってきて、歓声を上げたり、拍手したりして、熱烈な声援を送って下さいました。部員たちも、大きな声援に、大量の汗をかきながらも全力で演奏していました。

演奏会では、気仙沼の「みなと祭り」で数百人が一斉に演奏することで有名な伝統曲の「海潮音（みしおね）」を八幡太鼓と一緒に演奏しました。この地方のお祝いの席で必ず演奏された曲で、今ではこの曲は、復興のシンボルであり、希望の太鼓でもあります。演奏を聴いて、涙を流している方もいました。

翌日は早朝に、戻り鰹（がつお）の水揚げやフカヒレの切り取りが行われている魚市場を見学し、徐々に活気を取り戻している気仙沼の様子も見ることができました。仙台に向かう私たちのバスの見送りに八幡太鼓、仮設住宅、三陸新報の皆さんが見送りに来てくださり、見えなくなるまで手を振って下さいました。「また、気仙沼に帰ってきて下さい。」という皆さんの言葉が、部員たちの心に深く刻み込まれました。